

リキッド・モダニティ 第二章 個人

*要点のまとめ

イントロ

・ハックスリーとオーウェル…「大衆の不安」について違った見方を示す

ハックスリーの近未来：富と浪費、潤沢と豊満の世界

オーウェルの近未来：荒廃と貧困、欠乏と困窮の世界

共通するもの：厳しい統制社会に対する不安、つまり、人間を待ち受けているのは自由でなく、統制、管理、抑圧であるという将来像

→二人は、管理者、設計者、監督、つまり最高司令部のない社会を想像できなかった

重量資本主義と軽量資本主義

・ナイジェル・スリフトならば二人の小説を、創世記に対するヨシュア記になぞらえたいだろう。ヨシュア記的言説では、秩序が通常、無秩序が以上であるが、創世記はその逆である。

秩序は単調さ、均整、反復を意味する。

ヨシュア記の世界は厳格に管理された物で、特定の用途、目的を持たないものは存在しない。存在の正当化を必要としないのは秩序だけである。(秩序は、いわば秩序の自己目的だから)近代において、秩序を作り維持する作業は人間に任されている。

マルクス…支配階級の考え方が、社会における支配的考え方となることを発見

この200年間世界を支配してきたのは資本主義企業の経営者側で、支配的言説に内容を供給したのは世界そのものだった。

つまり、世界の支配的言説は最近までヨシュア記的なものだったが、創世記的なものになりつつある。ただ、産業界と学术界が同じ言説を共有することは新しい現象ではない。

ヨシュア記的言説に説得力をもたせていた世界には、フォーディズムの世界がある。

絶頂期のフォーディズムは、産業か、蓄積、規制すべてのモデルだった。

しかし、フォーディズムは生活全体をみおろす壮大な世界観をたてるための認識論的建設用地でもあった。

フォーディズム型工場：設計と実施、命令と恭順、自由と服従を細かく分離し、前者から後者へ命令がなめらかに伝達する仕組みを確保しつつ、前者と後者をしっかり連動させる工場

フォーディズムは、「重い」「大きい」「非機動的」「固定的」近代の自意識であり、フォーディズムの浸透を妨げる障害はないように思われていた。

フォーディズムの真髄：労働者を職場につなぎとめ、労働力の流動を抑える、目に見えない鎖

重量資本主義の資本は、労働者同様、一カ所にとどまって動くことがないが、最近の資本はそうではなくなっている、ただ、労働力の流動性は、いまでもそれほど変わっていない、
→軽量資本主義

免許・車アリ

マックス・ウェーバーは官僚制が未来社会の原型となると予測したが、その後の社会では、彼の予測と反対の現象が起こっている。

ウェーバーは「道具的理性」が勝利すると信じて疑わなかった。

彼は目的をめざすためのもう一つの行動を、「価値理性」と呼んで区別した。

価値理性とは、価値のための価値を「外的精講と無関係」の価値を追い求める行動を意味する。

今の軽量資本主義は、道具的理性の理想形ではないが、価値理性的なものでもない。

重量から軽量への移行過程において、中心組織によって下された、追求すべき目的の適否に関する、上訴不可能な最終審判を「絶対化」する権限を持った「政治局」の解体が起こった。

最高司令部が失われると、目的設定の問題が再燃し、際限ない躊躇と苦悩の原因をつくり、自信喪失、不確実性の予感、永遠の不安を生む。

重要なのは、もちうる手段の数と、その持続的有効性の限界を念頭におき、リスクを計算しながら、手の届くあたりに浮遊する魅力的な目的のどれを優先するかである。

あらたな状況では、人間全体、個人の生活のほとんどは、いかなる手段を選択するかでなく、いかなる目標を選択するかに悩みに費やされる。軽量資本主義は価値執着が強い。

「われわれになにができるか」という問題が、「しなければならないことをどうやってするか」という問題を圧倒し、すべての行動を支配するようになった。

最高司令部が見えなくなったいま、世界には可能性の無限の選択肢がある。

今、全ては個人に任されており、能力をみつけ、発展させ、それが最高に発揮できる目的を探し出す仕事は個人に任される。

そのような世界ではあらかじめ決定されたものはなく、ほぼ全てが変更可能である。無限であり続けるためには、全ては品質保証期限を明記されたうえで、流動的、流体的でありつづけなければならない。

人生は利点と欠点のあいだをぬって後悔していく物で、危険のない、絶対安全な航路はありえない。

行動に過失がないとすれば、行動の善し悪しも決定できないはずであり、さまざまな選択肢の中から、正しい物を選ぶことはできない。つまり幸福でもあり不幸でもあるということである。

説明でなく見本を！

軽量資本主義は、立法の権威を排除したわけでも、不必要な存在にしたわけでもなく、逆に、限りない数の権威を生み、共存させた。

「限りない数の権威」とは？

指導者と助言者について、重大な相違は、前者が信奉の対象であるのに対し、後者が雇用、時には解雇の対象だと言うことにある。

指導者は私的的幸福と「みんなの幸福」、私的不安と公的問題の間の通訳であるのに対し、助言者はプライバシーの閉じられた領域から、一歩でも踏み出すのをためらう。

われわれがすべきことは、みずからの良心にしたがって、自分の問題だけに集中することである。

助言を受ける前もあとも一人だが、助言を受けた人は孤独の中で強くなる。

助言を求める人たちが欲する助言はどう克服するかの実例であり、他人の「不幸せ」の感覚を見ることによって、われわれはみずからの不幸を克服するための方策を探そうとする。

例：ジェーン・フォンダ

実例対権威の関係で、現在、より重要で必要とされているのは実例である。

例：トークショー

利点：

- ・目的があやふやな世界にあって、人々の真剣な欲求にこたえるという現実的価値をもつ。

理由：視聴者は、人生から最良のものをひきだせるのは本人だけだと知っているから。

- ・トークショーは「問題に名前をつける」ために必要な語彙を提供し、多くの人々にも理解できるかたちで、言語化されていないものを言語化する。

- ・本来は個人的問題の公的言説化を認める。

社会的影響力のある多くの思想家は、将来、「私的領域」は「公的領域」に侵略され、選挙され、植民地化されるだろうと警告している。

いま、なされているのは、私と公のゆらぎつづける境界線の再検討ではなく、いま問われているのは、公的領域を私的芝居の公演場所として再定義するには、なにをなすべきかということである。

重要な結果は、政治が崩壊したこと、私的問題の公的課題への消化を目的とした、大文字の政治が崩壊したことである。

いま、一般に「公的課題」とみなされているものは、*公人の個人的問題*にすぎない。有権者のおかれた生活環境には具体例は必要だが、指導者は必要ない。人々は、表舞台にたつ人間が「重大な事象」の処理方法をわかりやすくみせてくれると期待する、個人が私的問題をどのように固定し、自分の技術と能力でどのように解決するかが、残された唯一の「公的課題」であり、「公的関心」の唯一の対象である。啓発や支持派自分自身の判断と努力の中で発見されるものだ、と信じさせられている視聴者、徴収者は、「自分に似た」他人の私生活をのぞきつづける。このときの熱意と期待は、予言者や伝道者に手本と、指導と、教訓を求めていた過去のそれと変わることがない。

中毒となった衝動

実例、助言、指導は中毒となる。

われわれが中毒しているのは、走り続けるという行為自体、競争に参加する満足感である。消費社会の構成員全員が参加する競技の典型は買い物である。買い物のリストに際限はなく、どんなにリストが長くなっても、買い物をやめることはできない。目的に限りがない世界にあって、もっとも必要とされる能力は、根気強い、買い物上手の能力である。

現在、消費社会をうごかす精神は、具体的必要性でなく、*欲望*である。欲望が消費者の購買意欲にかける制約は、消費物資の供給者にとって、重すぎる負担ともなる。結局、欲望を眠りからさまし、ある一定の温度まで厚くし、適当な方向へ動かすには、時間と努力と、かなりの経済的出費が必要になるからだ。

19世紀、経済学者が「堅固さ」の典型とみなしていた「必要性」は放棄された。

その後、流動的で拡張性に富む欲望が必要性にとって変わった。そして今、欲望が放棄される番となった。

消費需要を消費物資の供給に合わせるには、さらに強力で有効な刺激が必要となった。

「願望」は欲望の代替物として、ついに容器から放出された。

消費者のからだ

生産者と消費者の相違は決定的である。

生産中心に組織された生活は、特定の標準にしたがってがっちり組み立てられている。

生産者の主要な関心は、下限と上限のあいだにおさまるための適応力、また、隣人に遅れをとらないための適応力の保持にある。

消費中心の生活は。標準的規律でなく、誘惑、限りない欲望、変化の激しい願望に支配される。消費社会は全体比較の社会で、しかも、比較に際限はない。

消費社会の重要な関心は「準備をととのえる」姿勢、チャンスを逃さない力量、突然おこる、未知の誘惑にあわせて欲望を発達させる能力であり、また、刺激吸収の抑制を必要性にかえることなく、以前より多くのものを取り入れる能力である。

生産社会を構成する人々の遵守しなければならない基準がけんこうにあるなら、消費社会のそれは体力にあるだろう。

健康はかなり正確に定義され、価値判断をくだされた状態であるのに対し、体力は非固定的概念以外のなにものでもない。しかし、体力のあるなしの本当の決定は、つねに未来にゆだねられる。健康に「以上」「以下」はないが、体力を今以上にすることはできる。

健康と異なり、体力は主観的経験と重なる。

健康維持と違い、体力の増進に終焉はない。

健康は理論上基準によって規定され、解消不可能な不安とは無縁なはずである。しかし、実際、無限の可能性を特徴とする「流体的」近代においては、健康基準をふくむ、あらゆる基準の価値が激しくゆさぶられ、非実体化しつつある。

健康管理全般は、その本質に反し、体力増進と不思議に似通ってきている。健康をリスク回避の最良の手段ととらえる傾向は確実に強くなりつつある。

エクソシズム 悪霊払いの儀式としての買い物

内なる悪霊を払うには、積極的態度と行動が必要となる。積極的行動には消費社会のみが供給しうる、特殊な装置と道具が不可欠である。

マーシャル…多くの人間が同時に同方向へ走っているとき、二つの問いを投げかけてみる必要がある。人間は何を追いかけて走っているのか、人間はなにから逃れて走っているのか。楽しいものを追いかけているのかもしれないし、不安という苦悩からの退避路を模索しているのかもしれない。買い物中毒には、不安、不信という形で、夜な夜な出没する妖怪の悪霊払いの儀式という機能が含まれているに違いない。

買い物の自由、あるいは、そうみえるもの

カミュ…現代人の苦悩は、世界を完全に所有しきれなかったことだ。目的達成の鮮明な瞬間をのぞき、すべての現実是不完全である。

自分の人生を振り返ると、だれもがこの事実を発見するが、他人とは距離があるゆえ、統一性や一貫性があるように見える。したがって他者と同じ生活をしようと苦勞する。

人生を使ってこしらえた芸術作品は、「アイデンティティ」と呼ばれる。アイデンティティの追求とは、液体を固体化し、非形態に形態を与える連続的闘いのことをいう。

アイデンティティが孤立、確立して見えるのは、それに外側から一瞬目を向けたときだけであり、内側からは、アイデンティティは傷つきやすく、破壊的逆流によってポロポロにされているようにみえるはずである。

現実のアイデンティティは空想、夢想によってなんとかかたちを保っている。同じ役割を果たすより強力なものはファッションである。

消費依存が、消費社会においては「アイデンティティをもつ」自由を獲得するための必須

条件となる。「ユニーク」で「個性的」であるはずのアイデンティティが、だれでも買える商品によって形成される。

このようなアイデンティティの形成において、消費者にゆるされる空想、実験の自由はどれほどのものだろうか。

ほかにも、マスメディアはすさまじい影響力を持っている。

不安定なアイデンティティの材料に、意図的にもろい材料が使用される世界においては、柔軟性と、外的世界の変化にすばやく対応できる適応性が必要である。

今、甘言と誘惑が人々に基準を遵守させているため、規準への服従は外圧によるものでなく、自由意思の発動によるものに見える。

今日の消費社会における自由とは、アイデンティティのゆるい「連結的」形状、「商品を見てまわり」、真の自己を拾い、捨て、「動き回れる」機会のことである。

富めるものの選択肢が大きければ大きいほど、選択のない生活は、あらゆる人間にとって耐えられないものとなる。

ひとりで、われわれは買い物する

買い物中毒社会が究極の評価をあたえたのは、消費における選択肢の豊富さ、消費物資を選ぶように生活が選択できる自由だった。

資産の豊かさは選択の自由を意味するが、同時に、選択の自由がゆるされた生活のもっとも大きな欠陥、つまり、選択失敗による影響からの自由も意味する。

例：男女関係

アイデンティティの変化は個人的な出来事かもしれないが、変化には関係の切断、義務の放棄が含まれる。弱いほうの立場の人間は、変化が起こった場合、選択の機会を与えられるどころか、相談をうけることもない。

つまり、「選択と購買」中心の生活を特徴付ける、アイデンティティの流動性と柔軟性は、*自由の再分配*の手段にはなっても、*解放の媒介*にはならない。ゆえ、人々に矛盾した反応をひきおこす、一貫性のない、あいまいな価値である。

* 考えたいこと

- ・ 重量消費社会、軽量消費社会について
- ・ 「買い物中毒」が社会に及ぼす影響について

文責：菊地直子